

土屋健治・白石隆編

『東南アジアの政治と文化』（國際關係論の

フロンティア3）

北原 淳

一

本書は、一九六〇年代・七〇年代に東京大學教養學部教養學科國際關係論分科、同大學院國際關係論課程において、衛藤藩吉氏の指導を受けた研究者たちが中心になって編集した『國際關係のフロンティア』叢書の第三分冊にあたる。同叢書は四年前から計畫されたそうであり、八四年三月の衛藤藩吉教授の退官記念にタイミングよく出版されている。衛藤門下のうち東南アジア研究に志すようになったのは、本書に寄稿した人々のうち岡部達味、平川祐弘兩氏を除く、ほぼ三〇代の若き世代の人々である。しかもこのような若い世代の人々が東南アジア研究の中堅どころを占めている所に、わが國の東南アジア研究の歴史の若さ——もちろん戦前・戦中から名を成してきた何人かの大家・碩學がおられるが——と、若手研究者の才能とが反映されている。おそらく彼らの在學時代は外はベトナム戦争、内は大學紛争という大状況にとり囲まれていたものと思われる。そのような中で東南アジア研究を志す研究者群が生じたことは決して偶然ではないだろう。しかし、こうした「知識社會學」的考察は書評の範圍をこえてしまうのでとめておこう。

およそ書評の形式にはいくつものタイプがありうる。拙評は次の特徴・限界をもつことを申しのべておきたい。第一は、自らの關心に従いやむにやまれず筆をとったという動機に乏しいこと。第二は、専門家の書評ではなく素人の、一般讀者としての書評であること。第三は、本書の筆者諸氏の獨立の他の著作をほとんど拜見していないこと。第四は、東南アジアの植民地支配とナショナリズムをめぐる研究状況にほとんど無知なこと。第五は、「政治と文化」という領域は評者のもつとも苦手とする領域であること。以下要するに、東南アジアに若干の關心をもつ一般讀者が、書店でたまたま目にとまった本書を通讀して感じた讀後感といったレベルの「書評」にすぎない。

二

本叢書のねらいは「日本とアジアの國際關係の理解に基礎となる理論的、歴史的な視點と新しい分析方法を示すこと」（i頁）にあるといわれる。全四冊からなる同叢書中第三冊目にあたる本書は、個別獨立論文の集成ではあるけれど、次のようにゆるやかにくくることのできる問題關心を共有しているという。「それは、西歐とアジア及び日本とアジアをめぐって歴史的に形成されてきた國際的な權力狀況の東南アジアにおける表出の様相であり、同時に、この權力狀況がもたらした變化と變容を東南アジアそれ自體が（政府であれ個人であれ）どのように捉え、またそれに關與していたのかという局面である。換言すれば、ここでの東南アジアは、〈アジア〉と〈西歐〉、〈傳統〉と〈近代〉、〈周邊〉と〈中心〉等、それぞれにその收斂の極點を異にするパラダイムの重なり合う状況において捉え

られる一方、このいわば切りさかれた状況における東南アジア自體の主體的營爲が問題とされているのである」(vii頁)。

正直言つてこの表現は一般讀者には抽象的でありすぎる。「國際的權力狀況」と「主體的營爲」という表現が、國際關係論の常識であるのかも知れないが、少くとも歴史的事實(概念化された事實)では、植民地支配とナシヨナリズムとあつういわれている現象である。一般讀者としては、本書は東南アジアにおける植民地支配、日本軍政とナシヨナリズム、國家形成との關係を論じたものだともまとめてもらう方がわかりやすい。事實、このまゝに先行する個別論文紹介の部分の「まえがき」では「ナシヨナリズム」「植民地支配下」という言葉が使われているのだから、それで一向さしつかえないはずである。あるいは古田元夫氏の第一論文、平川祐弘氏の第七論文等が、このような枠組から多少ずれてしまうことへの考慮から、上記の抽象的表現になつたのかも知れない。

ところで植民地支配とナシヨナリズムといつても單純な善惡、プラス・マイナスといった基準でおしはかれないことは本書の個別論文の實證例が示している所である。ベトナムの民族意識は對北方中國との對抗關係では明確であつたものの、對西方ラオス・カンボジアに對して不明確となり、西方に對して國民國家的認識をもつ共產主義者でさえ、當初はこれを自國防衛の戰略的意義からとらえたにすぎない(古田論文)。インドネシア地域を包含するインドネシアのナシヨナリズムは、一方での宮廷詩人の傳承詩に象徴される人民レベルの文化と、他方でのこれと相克しながら確立した、オランダ語で表現される「ジャワ學」に象徴される知識人レベルの文化とに規定されている(土屋論文)、日本軍政下での地方行政は、彼

らがオランダ支配下で保持してきた傳統的特權、權威、身分をゆるがし、すでに獨立革命前に彼らの階層的變質をもたらしつた(倉澤論文)、等々の事實がそれである。植民地支配や軍政は、ある局面においては、政治的、經濟的のみならず文化的にも國民的統合に貢獻し、ナシヨナリズムを逆説的にはあるが育てた。他方のナシヨナリズムは民族國家の政治的獨立にもかかわらず、いまだ國民的統合に成功せず、權威主義に陥り、またより弱少な國內少數民族や他民族抑壓のプチ帝國主義的傾向さえ招きかねない。おそらくこのような諸事實があることもまた否定できないだろう。

〈アジア〉と〈西歐〉、〈傳統〉と〈近代〉、〈周邊〉と〈中心〉等のパラダイムの重なりあいとその中で「主體的營爲」という表現はおそらくそのような事態をも念頭においているのだろう。しかし問題は、植民地支配や軍政のもたらした「文明化作用」やナシヨナリズムのもたらした權威主義・排外主義などの諸側面を實證的に明らかにすれば足りる、という所にならないことは自明である。そのような實證的作業を支える研究者の問題關心のありようこそ問題である。

もちろん研究者の問題關心といつても、さまざまなレベルがありうるが、たとえば現代という時代と東南アジア諸國の問題狀況とに規定された問題關心がその例である。ベトナム戦争の終結とインドシナ社會主義圈の成立、民族主義の挫折と「開放經濟體制」への移行によるASEAN圈の成立という狀況をふまえて生じた研究者の問題關心から、過去の植民地支配とナシヨナリズムへの再評價を試みる、というのがその例である。これはあくまでひとつの例、つまり現代的關心からの植民地支配・軍政・ナシヨナリズムの再評價、である。研究者は、こうした再評價の基準の明確化と相對化という

二點において自覺的でなければならぬだろう。とまれ、本書を通讀してみると、植民地支配・軍政・ナショナリズムに關する再評價の氣運があることを感じないわけにはゆかない。

三

以下では各論文の要旨を紹介し、若干のコメントを加えてゆくこととしたい。

古田元夫「ベトナム人の『西方關與』の史的考察——インドシナの中のベトナム——」は、ベトナム人共產主義者（そしておそらくはインドシナ社會主義圏内でのベトナム）の對ラオス・カンボジア認識にみられる特徴を、西方（＝西北地方及びラオス）政策に限定して、歴史的繼承性、連續性という側面から検討したものである。

ベトナムにとって西方の意義は、西北部山岳地帯が抗戰にとって重要であること、西側から脅威をうけた時自らの安全が脆弱であること、の二點にあると認識されている。この認識は歴史的對外行動のパターンの中で形成された。第一の點は、西北の山岳地帯が反亂軍や抵抗軍の抵抗の據點となった歴史的事實にもとづく。第二の點も、西方の強國ランサン王國に對し、一四七九年黎聖宗が遠征を行ない、西北部土侯國のランサン王國への服屬關係を斷つた故事などにかがえる。西北地方山岳部はシブソン・チュー・タイなどタイ系諸族の土侯國が分布したが、ベトナムは、「北方」「南方」と異なり直接關與、統合策をとらず、半ば獨立した地位を與えていた。もともと一九世紀に、シャム王國が強力となって、ラオス、カンボジアに影響を及ぼすに至ると、ラオスの小土侯國を羈縻州に編入し、西北部に「改土歸流」を強要する等、西方統合が強まった。し

かし總じて、「北方」「南方」と比べた場合の、「西方」統合政策のあいまいさは、領土歸屬や政治秩序のあいまいさをもたらすことになり、このようにして形成された關與のパターンが、フランス植民地支配下でのベトナムの對ラオス、カンボジア認識を規定した。

『傳統的な『西方關與』における境界意識のあいまいさと、フランス支配形式の直前には、西方にベトナムにとっての明確な秩序が確立されていなかったことは、この西方を包含して成立したインドシナという枠組に關するベトナム人の認識に、混亂をもちこんでいた』（二二頁）。結局共產主義者が西方秩序の體系的回答者となった。

古田氏は「西方」として今日のベトナム西北部とラオスを念頭においておられるようであるが、ここで扱われている西方は主として西北部であり、それがのちのラオス認識までも規定したかのように想定するのはやや飛躍がある氣がするが、いかなものだろうか。

白石昌也「チャン・チョン・キム内閣成立（一九四五年四月）の背景——日本當局の對ベトナム統治構想を中心として——」は日本占領下での佛印武力處理とチャン・チョン・キム内閣樹立に至る過程を、日本當局の殘した史料と當時の關係者へのインタビューとを用いて實證的に検討している。

一九四五年三月九日インドシナの日本軍は反佛クーデタ（明號作戦）を實行し、バオ・ダイ帝は獨立宣言を行ない、チャン・チョン・キム新内閣が成立した。このキム内閣について、親日的政治活動家から構成されたとする説と、技術専門家から構成されたとする説とがあるが、白石氏は後者を正しいと斷定する。四五年八月革命でベトミンが勝利するが、バオ・ダイ——キム内閣が政治的イニシアをとるのになぜ失敗したのか、その諸要因を検討する必要がある

る、というのが白石氏の問題關心である。

四四年一月フイリン戦敗北を機に、日本にとり最前線となつた佛印の武力處理が急遽現實化し四五年二月一日最高戦争指導會議において正式決定をみた。それまで現地軍には林秀澄憲兵中佐の、親日政權樹立による安南獨立案のような統治案も出たが、南方總軍、現地軍の最終案は事實上の軍政案であり、二月一日決定は陸軍案に近いものだった。外務省は、獨立付與の幅、外交權限の存続等をめぐり陸軍に若干の抵抗をしたが、おしきられた。クーデタの結果選ばれたキム内閣は、親日的民族主義者政治家を排除した、専門家・知識人からなる傀儡政權となつた。

詳細に軍、外務省の占領・外交の内幕を實證した點は多とすべきだが、諸事實と「バオ・ダイ・キム政府の失敗の諸要因」との関係が明示的でない。白石氏のベトナム・ナシヨナリズムに關する全體構想と本論文の位置附の簡単な紹介がほしかった所である。

土屋健治「一九世紀ジャワ文化論序説——ジャワ學とロンゴワルシトの時代——」は、「ジャワ核心域 *Kejapen* における文化史を、近代（ジャワ學）と傳統（ブジャンガ（宮廷文學者）の世界）の基軸で描き出し、それを通じて、ジャワ語という言語世界のあり方を考究するものである」（七六頁）。しかし土屋氏の最終的關心は、近代オランダ語文化とナシヨナリズムの內的關連、傳統的ジャワ文化の解體・展開がナシヨナリズムに與えた規定性を問うことにある、とされる。

初期ナシヨナリズムを培養したオランダ語文化の代表例として、ジャワ學（ジャワ研究）が、制度、ジャワ語研究、ジャワ文化・文學研究の諸點が紹介される。一八三二年スラカルタに設けられた

「ジャワ語研修所」(C. F. Winter, J. A. Wilkens 等の活躍)・一八四三年デルフルトに設立された王立アカデミー (Taco Roorda 等が活躍) は、ジャワ學者、植民地官僚を養成し、その他バタヴィア學術協會、王立言語文化研究所等もそれに寄與した。Roorda によるジャワ語辭典の編纂を中心としたジャワ語研究の發展、これと平行したジャワ文化・文學研究の繁榮がみられ、この中でジャワ人の参入もみられた。

ジャワ學隆盛の陰で、傳統的ジャワ文化が衰退した。その擔い手である宮廷文學者（ブジャンガ）の代表格ロンゴワルシト（一八〇二—一七三）がとりあげられる。彼の仕えたスラカルタ王家では一八世紀以降文藝興隆がみられたが、皮肉にも、これはオランダによるマタラム王國の分斷固定策で王國內秩序が安定したのを一因とした。この中でヨソディプロからロンゴワルシトに至る著名ブジャンガたちが、年代記の編纂、古物語の編集、物語・韻文の創作を行ない、文藝ルネサンスを迎えた。しかし輝ききロンゴワルシトも、ジャワ學に参入したジャワ人學者から酷評をあびることになる。一九世紀中葉すでにブジャンガはオランダのジャワ學に奉仕するインフオーマントに陥っており、以後傳承文化の傳統は衰退の一途を辿つた。しかし、獨立後ロンゴワルシトは「人民詩人」として、獨立を豫言した偉大な豫言者として、「人民」ナシヨナリズムの再評價をうるに至つた。

土屋氏の最終的關心であるとされるナシヨナリズムにとってジャワ學の功罪はどうであつたのだろうか。戦後のインドネシア語世代の研究者、知識人がどのような評價を與えているのかはひとつの参考になると思われる。

白石隆「進歩と自由——マス・マルコ・カルトディクロモの「旅から——」は、民族主義者カルトディクロモによる二つの小説、『學生ヒジヨ』（一九一七年）と『自由の味わい』（一九二三年）、の比較を通じて、サトリオ（志士）から共產黨員に轉じた彼の思想の軌跡を追った作品である。

『學生ヒジヨ』の主人公ヒジヨはオランダ高等學校を卒業した一八歳の青年で、親が決めた許嫁のビルーがいた。ヒジヨはその後オランダへ留學し、オランダ娘ベーチエの性的魅力に溺れるが、ある日受けた故國からの手紙で、ジャワの呼び聲に目覺め、ベーチエヨーロッパ文明と訣別し、ジャワに回歸する。結婚は同級生の友人の妹（でビルーの友人）との戀愛で結ばれるが、親がまとめ、結婚を機に、兩家の親族紐帶を強める、という形となる。

『自由の味わい』の主人公スジャンモもオランダ高校卒業の一八歳の、田舎の副郡長の息子だった。父親の希望通り官吏見習となったが、オランダ人監督官の下での屈辱にたえられず、辭官して、旅をしP市でヨーロッパ人商社の會計係となった。ここでサストロ夫妻という友人をえて、共產黨の政治集會に参加する中で社會主義者に回心し、集會で知りあったロロ・スピニと戀愛結婚をする。

以上二つの小説の紹介ののち白石氏はそのちがいを二點にまとめる。第一は、ヒジヨの旅は行って戻る旅、傳統回歸の旅であったのに對し、スジャンモの旅は行って戻らぬ旅、傳統からの自由の旅であった。第二は、ベーチエの性的魅力はジャワの傳統的知恵と無關係の存在だったが、オランダ人監督官はジャワ人以上に露骨に跪拜を要求し、オランダ人商社社長は勞働力商品を介して結ばれた經濟的存在であった。結局マルコのえがきたかったことは「ジャワの跪

拜の構造」と新世代の中産階級カウム・ムダ（若い世代）の「世代的自立」である。

社會科學者による文學作品の分析は、社會科學にとって新しい試みのひとつで、内外で流行のきざしがある。いささか乗りすぎの箇所も感じられるが、讀みものとしては最も楽しい一篇である。

倉澤愛子「日本軍政下におけるインドネシア地方行政官の變容と展開」は、日本の軍政によって、オランダ植民地の下で經濟的政治的權限を喪失しながらなおかつ傳統的權威をもっていた地方行政官が、その權威を失墜させられ、世界觀、行動様式、集團意識を變質、動搖させられたことを實證した論文である。

一九四二年日本當局は、オランダ人官僚と原住民官僚の二本立だった地方行政を廢止し、レジデント（州長官）を残し前者を廢止、現住民官僚行政の一本とした。加えて、人事面では、占領軍政に非協力的な官吏の排除を行なったが、後任人事は慣例を無視し、たとえば縣長に世襲制を無視し家系外の者の登用を行うなど、新しいパターンを導入した。

占領當初は日本軍政當局は地方行政官を敬遠したが、戰況惡化とともに現地物資、勞働力依存度が高まり、この調達・動員のルートを握る彼らの實務的能力に頼った。このため、末端の村落社會への不干渉を基本としたオランダ植民地支配とちがひ、村落社會での村長の調達・動員の實務がふえ、これが村民の反撥を買い村長の權威を低下させる等の形で、村落社會への直接干渉と勢力關係の變化が進行した。「バンングレ・プラジャ集團は、日本軍政期をへて、内的にもあるいはまた外からのイメージという點でも權威の低下と變容を餘儀なくされた」（一七七頁）。

地方行政のある種の「合理化」がなげもたらされたか、に關しては、「血統、儀禮主義、神秘的色彩、威嚴といったものを從來非常に重んじる日本の文化の土壤」(二七二頁)の崩壊が、日本國內の農村行政でも、地主制崩壊の形で進行したわけであり、戦争遂行のため内務官僚が行なった合理化と解釋できないだろうか。

岡部達味「シンガポールの二種言語政策」は、一九六六年に提起され七〇年代に加速された、國民統合Ⅱ國民形成のためのバイ・リンガル政策を跡づけたものである。また平川祐弘「レオカディオ・デアシスの『南方特別留學生トウキョウ日記』と森鷗外の『獨逸日記』——留學體驗と近代化運動——」は南方特別留學生の日本滞在と日本人との交流を、戦争目的をはなれた、後發國の指導者の留學體驗としてながめたエッセイである。行論との關係上、岡部氏の論文を紹介したいがもはやスペースがない。「ナシヨナリズムの克服やトランスナシヨナルな交流が謳われる時代にネーションを形成しなければならぬ國の悩み」(二〇九頁)とともに、それが強權政治にもとづく完璧な管理社會という特徴を伴っている側面をも強調してほしかったと思う。

四

叢書のねらいとされる「新しい分析方法」が、もし單なる謳い文句でないとすれば、本書の筆者たちに共通しうかがえる文化パターンのアプローチは、その「新しい分析方法」がさすものであらう。筆者たちは、國際關係論という分野の専門家であるが、その方法論はおそらく、國際關係の現代史的、帝國主義論的、あるいはパワー・ポリティックスのアプローチとは全くちがったものである。

一見して、彼らには文化人類學、社會學等という「文化」理解の素養があることがわかるが、これが衛藤門下の學風なのであらう。本書の方法論にもうかがえるが、それは歴史的變動過程の中から、ある種の文化パターンを検出し、そのパターンの確立と崩壊を追ったり、パターン間の相互關連を問題としたりする態度に顯著である。

きわめて亂暴な印象をのべさせてもらうと、本書で描かれている植民地支配、軍政(そしてナシヨナリズム)は、いささかきれいな事すぎる。おそらく「戦争を知らない」研究者世代の時代認識、先進社會にはびこりつつある保守化の雰囲気等々の「知識社會學」的考察も必要だろうが、こうした印象を抱せる最大の要因はパターン認識的方法論にあるように思われる。

第一は、パターン検出の基軸が「近代」と「傳統」に偏りすぎていはいまいか。植民地支配、軍政の陰の構造をあきらかにする基軸がほしい所である。「周邊」への配慮に缺けると思われる。第二は、パターンの検出、設定が大きすぎる点である。またパターン内部での矛盾、對抗的要素の検出といった点も弱いようである。第三は、エリート文化中心主義、外交政策中心的歴史觀とでもいえる傾向も感じないわけではない。本書に「無告の民」はついにほとんど登場しない。第四に、文化と社會階層、社會構造のつながりが明白でない。

紙數の都合で右の諸點のような感想を生じさせた本書の實例箇處をあげることはできない。しかし、評者としては、本書だけの敘述をもって、衛藤門下の個々人の個性あふれた研究の全體像を評價する資格は全くない。また「きれいな事」の印象とは別に、幅広い文獻と關係者インタビューとを使ってあきらかにされた研究内容がわが

國東南アジア研究の最良の部分の構成することも信じて疑わない。またさらに、この諸國の文化パターン分析に根ざした方法論は、世界システム論と社會史、機能主義と現象學に二極分解しかねないわが國歴史學のはやりの傾向に對し、新鮮な一石を投ずることも信じてやまない。

一九八四年三月 東京 東京大學出版會

A 5版 二三五頁 二八〇〇圓

山内昌之著

オスマン帝國とエジプト

——一八六六―六七クレタ出兵の政治史的研究——

濱田正美

歴史研究が史料の上に構築さるべきものであるからには、その史料は出來得る限り、「文書、即ち日々の生活の明確な要求に的確に應じる爲に作り置かれた真正の記録」(T. Sauer)に求めらるべきことは言うまでもない。オスマン史研究者にとっての幸運は、その對象がイスラム圏では例外的に多量の文書に恵まれていることであり、同時に我が國のオスマン史研究者の不運は、それらの文書に餘りにも近寄り難い(彼我の地理的なへだたりという意味でも、古文書研究に必要な基礎的訓練の機會を見出し難いという意味でも)ことであつた。しかし、十年來その困難は徐々に克服されつつあ

り、例えば我々は既に『*Muhsin-zâde Mehmet Paşa ve Asyâhik Müssesezi*』Tokyo, 1976. を始めとする永田雄三氏の一連の業績を持つてゐる。ここに取り上げる山内氏の近著は、我が國の研究者により日本語で著された、オスマン語文書を扱った最初のモノグラフであり、我が國のオスマン史研究に一期を劃す記念碑的業績である。歴大な文献を博搜して成つた前著『現代のイスラム』に續き、一轉文書の海に遊弋して、行くところ可ならざるは無き研鑽と精勵を示された著者に對し深い敬意を捧げるものである。

ところで山内氏は、この著書に「研究史と問題設定」「本書の構成と史料」という節を設け(序章第二、三節)、本書が研究史上に占める位置及び各章の梗概とその敘述の意圖を簡明的確に述べることに、怠惰な書評者が概略を記してその責めを塞ぐ道を豫め鎖してしまわれた。それ故以下では、單なる内容の紹介は出來る限り避け、文書史料の轉寫と翻譯の問題を中心に、私の感想と意見を率直に述べていきたい。餘りに細かな問題のみをあげつらうことになるかも知れぬが、豫め著者並びに讀者諸氏の御寛恕を願う次第である。

本書の冒頭に於いて、著者はその課題を以下の如くに明確に規定されている。即ち「本書の主要な關心は、ムハンマド・アリー王朝のエジプトによるオスマン帝國支配からの分離プロセスを一八六六―六七クレタ革命との關連で位置づける點にある。その際、われわれが留意したのはエジプトの分離と自立のプロセスを中東もしくはオスマン帝國の内部からの視點で扱うことであつた」(二頁)更に又「本書の限定された目的は、(中略)エジプトによるクレタ出兵の經過と實態を明らかにしながら、エジプト近代史とトルコ近